俳句

12月17日（土）
当季雑詠　持寄句会
合田　青幹

着ぶくれに尚洒落心失はず
追憶の庭に逝く年惜しみけり

小笠原さちを

この雲の降らして過ぎし片時雨
一枚の紅葉栞に旅終る

1月21日（土）
五台山　牧野植物園
合田　青幹

城の梅一輪二輪にて候
百態の老梅林や楮伸ぶ

小笠原さちを

倒木の朽ち果ててをり霜柱
寒日和三川遠く裾を引く

新刊『ビキニ核被災ノート』（A4、240ページ・税込1000円）の紹介

いよいよ2月25日より発送開始となりますので、本日より注文の受付を始めました。

金高堂書店など高知県内の主な書店での販売は、高知新聞朝刊で紹介される3月11日頃からになります。それまでに手にしたい方は、添付しましたチラシの申し込みをご覧いただき、太平洋核被災支援センターに電話かFAXにてご注文下さい。お支払いは本の発送時に振込用紙を同封させていただきます。

『ビキニ核被災ノート』は、1954年マーシャル諸島ビキニ環礁でのアメリカの水爆実験で被ばくした高知の元マグロ漁船員と遺族32名の証言集です。「キノコ雲を見た。こんなに大きかった」「雪と思うて集めて食べた」と具体的に語っています。そして家族は「なんであの時、知らせてくれなかったのか」と政府に対して怒り、無念を語ります。

『ビキニ核被災ノート』は、日本政府が故意に60年間も隠ぺいしたビキニ核被災事件の体験を語る真実の証言集です。また、証言のほか、新しく発見された資料に基づいて60年間、日本政府が故意に隠ぺいした背景に迫り、日本の民主主義と人権の問題として提起しています。「ビキニ事件」隠ぺいの目的、そしてその目的を達するために日米のどのような人物が動いたのかを明らかにしています。

短歌

人類
山本晶子

異常なる豪雨・雷・電・台風、温暖化によると科学者の言
福島原発、廃炉のために働く人、日に七千人余四十年つづく

（NHKスペシャル「廃炉への道」）

「人類は自分で自分の首をしめている」原田マハ氏の言葉諾う

（作家）

「灯点」欄
榊原忠彦

初詣で天満宮の参道で倒れしわれを女抱へぬ
加齢黄斑変性でまた手術今度は高齢なるを医師は憂慮す
夕刊で月一回の「灯点」欄、執筆者それぞれを心こめ読む

舞台はつづく
叶岡淑子

幕開きぬ「寺田寅彦物語」劇団zhe・創十一年目の舞台
槇村浩・牧野富太郎・寅彦と土佐の偉人の舞台はつづく
教え子の西森良子氏作・演出　次の企画は上林暁と

きみのまぶしそうな笑顔

西村　雅人

二十歳の頃
世界はちっとも美しくなかった
ぼくは東京の街をあてもなくさまよい
凍え死にしそうなくらい独りぼっちだったよ

世界の果ての流刑地
自分の部屋をそう呼んでいたくらいだ
世界に意味なんかない、ときみは言ったね
きみに会いたいよ、T君
もしもきみが生きていたら……
きみは同じ流刑地に暮らす同志だった
たった一人の大切な友だった

出会ったのは四十年も昔のことだけど
記憶は不思議なくらい鮮明だ
ニーチェにカミュ、そして禅の哲学
きみの静かな口調が今も耳の中でこだまする

大学を出たあと
きみは地元の東京で就職し
都落ちのぼくは泣く泣くふるさとに帰り
お互いにお互いが行方不明となって
知らぬ間に時代は無情に過ぎた

ずいぶん前に
きみの夢を見たよ
妙に神秘的だったので
今でもありありと憶えている

草原が果てしなく広がっていて
地平線から大きな川がうねりながら
こちらの方へ流れていた

きみは遥か彼方から
川に沿って緑の土手を歩いてきて
巨きな木の苔むした根もとに立って
あのなつかしい笑顔になった

やあ、元気かい
きみはそう言ったっきり
にこにこしていた
春のような日ざしをまぶしそうにして

きみはこの世を去るまえに
さよならを言いにきてくれたんだろう？
眼が覚めてそう思ったよ

きみの安否を確かめようとしたけれど
流れ去った時はあまりに遠く
きみの痕跡はどこにも見つからなかった

今、ぼくの記憶に残っているのは
やさしい言葉で哲学を語るきみの静かな横顔と
大学ノートに書いた詩を朗読する軽やかな声と
夢で見た、緑の土手に立つきみの
あのまぶしそうな笑顔